

<実践地域基盤力テストの分析結果>

白石准教授

実践地域基盤力テストの 分析結果

白石 哲也(山形大学 学術研究院)

山形大学の白石と申します。本日はよろしくお願ひいたします。

私の方からは、実践地域基盤力テストについてご説明します。

(再掲) 基盤力テストの概要

- 学問基盤力テスト
 - 数的文章理解・数学・物理学・化学・生物学
- **実践地域基盤力テスト**
 - 5因子性格調査
 - 出欠状況・ポートフォリオ(現存)
 - フィールドワーク・インターンシップ・課外活動実績
- 国際基盤力テスト
 - TOEIC-IP(現在2回実施)
 - eラーニング、留学等国際関係活動実績

こちらは、5因子性格調査、出席状況、それからフィールドワーク、インターンシップなどがあるんですけども、この中の5因子性格調査に関して報告をさせていただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

開発の概要

- 「キー・コンピテンシー*」とよばれる
習慣や態度に対応する能力に関する指標を測定したい
➢しかし、そのようなテストは確立されていない
- 山形大学では「キー・コンピテンシー」を
そのまま測定するのではなく、
その基礎となる習慣や態度を測定する
「5因子性格調査」を実施



こちらの実践地域基盤力テストに関して、私たちの方では、これをキーコンピテンシーと呼ばれる習慣や態度といった能力に対応するものとして、指標を測定していきたい、ということで5因子調査をしております。これはあくまで、テストとして確立されているものがなかなか無いことから、5因子性格調査を使わ

せていただいているということになります。

5因子性格調査とは？

設問数	70問(「はい」「いいえ」で回答)
実施時期(4月)	新入生 入学ガイダンスの時 2年生 2年生ガイダンスの時
回答に要する時間	5分程度(想定)

5因子

E: 外向性
A: 協調性
C: 良識性
N: 情緒安定性
O: 知的的好奇心



必要な時に必要な行動特性を示す
「適応能力」を高めることに利用
(向き不向きといった直接的な評価や
個人の性格診断は行わない)



実際にどういった方法で実施しているかというところなんですけれども、まず設問数としては70問を設定しており、こちらの方は、「はい」「いいえ」という形で回答をすることになっております。実施時期は基盤力テストと同様で、4月の新入生であれば入学生ガイダンス、それから2年生であれば2年生のガイダ

ンスのときに実施するという形で、回答に要する時間はおよそ5分程度になっております。5因子調査についても、基盤力テストと同様に「YU ポータル」というアプリの中で実施させていただいております。調査因子としては、外向性・協調性・良識性、それから情緒安定性・知的的好奇心というところで確認をしており、必要なときに必要な行動特性を示す、適応能力を高めることに利用するという形で活用しています。

5因子スコアの比較

入学生のスコア比較: 2017~2019年度入学生

5因子	2017年度入学生*		2018年度入学生**		2019年度入学生***	
	Mean	Std. Dev.	Mean	Std. Dev.	Mean	Std. Dev.
E: 外向性	46.0	10.5	46.0	10.1	46.2	10.5
A: 協調性	52.0	8.7	52.4	9.0	52.9	8.8
C: 良識性	54.5	9.5	54.3	9.7	54.7	9.8
N: 情緒安定性	47.6	9.7	48.4	9.3	48.3	9.5
O: 知的好奇心	49.4	9.7	49.8	9.8	49.5	9.9

* 条件を満たす2017年度入学生 (N = 1,691)

** 条件を満たす2018年度入学生 (N = 1,721)

*** 条件を満たす2019年度入学生 (N = 1,715)



さて5因子スコアの比較というところになってくるんですけども、私たちの方では2017年度から2019年度の入学生を見ておりまして、3年間実施してきましたので、ようやく経年で見るできるようになりました。簡単に見ていきますと、2017年度入学生は、まず例えば外向性の平均ですが、こちらの

方は46.0という値になっており、標準偏差では10.05。2018年度入学生は、平均が大体46.0、標準偏差が10.1。2019年度に関しては、平均が46.2、標準偏差が10.5。また外向性だけでなく、良識性も見ていきますと、平均が54.5、標準偏差が9.5、平均54.3に9.7、54.7の9.8という形で、ほかの数値もそうなんですけども、基本的に各年度でそれほど大きく変わらないのかな、というようにところが見えてくるかなと思います。

これらの特徴としましては統一されたシラバスと教材があります。また、授業スライドも統一的に配られ、それを使用している、というところになります。課題や採点基準も同様になっております。クラス編成に関しては、これ下の方に書いてあるんですけども、ちょっとクラスサイズを2018年度以降に変更しておりまして、大体25人程度。その前が30人ぐらいいたんですけども、そこから5人ほど減らしているということになります。ここでは学部であるとか性別をバランスよく混在させていって、その中でグループングもしているんですけども、できるだけ学部や性別をバランスよく配分するという形で実施しております。

分析方針

■ 基本的な問い

- ・ 各5因子スコアと学業成績の間に**関連性はあるのか？**

■ 分析に使用する学業成績データ

- ・ 2018年度前期における**スタートアップセミナー**（2単位）の**出席状況と成績**
- ・ 2018年度前期におけるGPAは、9/13時点で入力が完了していなかったため、**利用不可能**

■ 今回の分析

1. 各5因子 vs. スタートアップセミナーの**成績**
2. 各5因子 vs. スタートアップセミナーの**出席状況**



次に、これらを分析していくことになるんですが、各5因子に対する基本的な問いとして、各5因子スコアと学業成績の間に**関連性があるのか**というところで分析をしていきました。また、今回は2019年度前期におけるスタートアップセミナーと呼ばれる、本学で行っている導入教育の授業なんですけれども、こちら

の方の出席状況と成績をクロスする形で見ております。分析としては5因子と成績、それから出席状況になります。まずスタートアップセミナーという授業の概要ですが、大学生として1年生、特に前期において学んでおく必要とされる学習スキルの向上、若しくは身につける能力ですね。それらを目的として設定された導入科目となっております。ここでは授業の中で調査とか情報収集、あとは若干のレポートの書き方であるとか、口頭発表とか、そういったものも授業の中で実施しております。

分析方針（つづき）

■ 大学生として**必要な学習スキル***の向上を図ることを目的とした大学導入科目

■ 特徴

- ・ 統一されたシラバスと教材／スライド
- ・ 統一された課題と採点基準
- ・ 1クラス25人程度：
学部や性別をバランスよく混在
- ・ コマ目を実施

フォーマットが揃っている

■ 2018年度以降のクラスの特徴

1. 「ピアメンター」制度を導入
2. クラスサイズを変更



これらの特徴としましては統一されたシラバスと教材があります。また、授業スライドも統一的に配られ、それを使用している、というところになります。課題や採点基準も同様になっております。クラス編成に関しては、これ下の方に書いてあるんですけれども、ちょっとクラスサイズを2018年度以降に変更して

ありまして、大体25人程度。その前が30人ぐらいいたんですけれども、そこから5人ほど減らしているということになります。ここでは学部であるとか性別をバランスよく混在させていって、その中でグルーピングもしているんですけれども、できるだけ学部や性別をバランスよく配分するという形で実施しております。

スタートアップセミナーの成績（1）

■ 5段階評価：S, A, B, C or F

➢ スタートアップセミナーは、以下の条件を満たせば「A以上」の成績が取れるようデザインされている。

1. 課題を期限までに提出
2. 明記されている評価基準を満たす

→ A以上=アウトカムが達成

成績比較：2017年度クラス～2019年度クラス

成績群	2017年度		2018年度		2019年度	
	Freq.	Percent	Freq.	Percent	Freq.	Percent
成績良好 (S or A)	1,427	84.4	1,499	87.1	1,512	88.1
成績不振 (B, C or F)	264	15.6	222	12.9	203	11.9
Total	1,691	100.0	1,721	100.0	1,715	100.0



授業は、基本的に朝一限に実施するということになります。

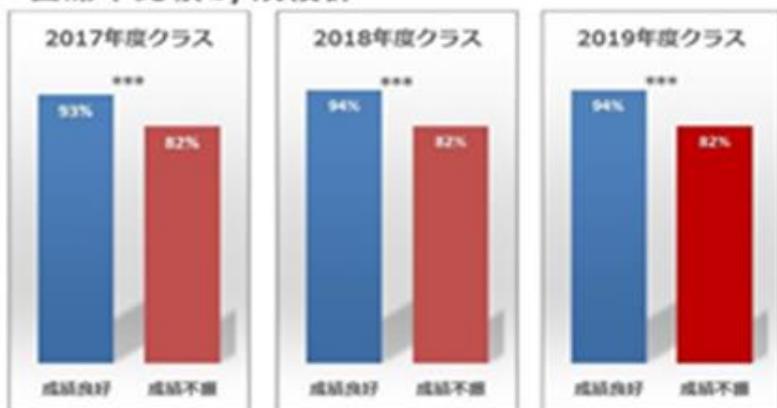
このような授業の中で学生の成績とかを見ていくこととなります。成績は5段階評価ですね。S・A・B・C・Fという形で、基本的に他の授業と変わらない成績評価となっております。ただし、授業思想としてはスタートアップセミナーの

授業というのは、A以上の成績が取れるようにデザインをする。というかそこをアウトカムに考えています。学生の大学で学んでいくためのスキル等を到達目標と見ております。そのため、基本的には課題を必ず期限までに提出すること。それから事前に明示している評価基準に合うようにきちんと満たしているかというところを見ています。

では成績の比較なんですけれども、そういった形で授業や成績をつけていきますと、基本的に成績良好者が多くなり、大体 S・A が成績良好で、B 以下を成績不振という形で見ております。概ね 2017・2018・2019 年度を見ていただいても、ちょっと 2017 年度は若干ポイントが下がるんですが、2018・2019 は基本的に 80 パーセントから 90 パーセント近くが成績良好者。成績不振者というのは 10 パーセントちょっとになっております。

スタートアップセミナーの成績（2）

■ 出席率比較 by 成績群



これらを出席率の比較を成績別で見ていった場合なんですけれども、例えば 2017 年度クラスから見ていきたいと思えます。こちらの方を見ていくと、やはり基本的に成績良好の方が成績不振者よりも出席率が高いということが分かります。また 2017 年度であれば、成績良好者が 93 パーセントで成績不振者は

82 パーセント。これは基本的ほとんど変わらず、2018 年度・2019 年度においても 94、82 という形で、成績良好者の方が出席をしているということが分かります。

スタートアップセミナーの出席状況

■ 出席：80%以上の出席を期待

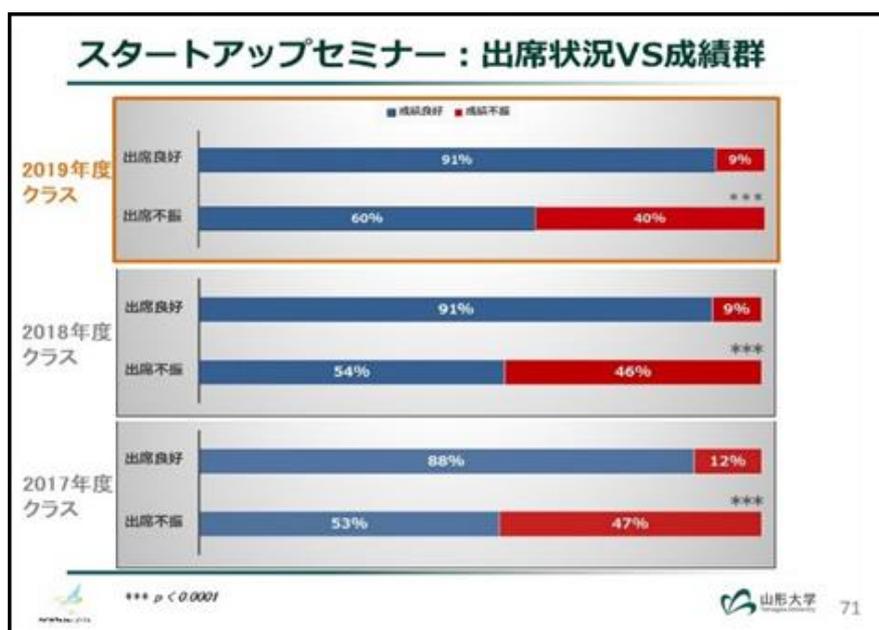
出席率比較：2017年度クラス～2019年度クラス

出席状況	2017年度		2018年度		2019年度	
	Freq.	Percent	Freq.	Percent	Freq.	Percent
出席良好 (80%以上)	1,515	90.0	1,524	88.6	1,542	90.0
出席不振 (80%未満)	176	10.0	197	11.4	173	10.0
Total	1,691	100.0	1,721	100.0	1,715	100.0

山形大学 70

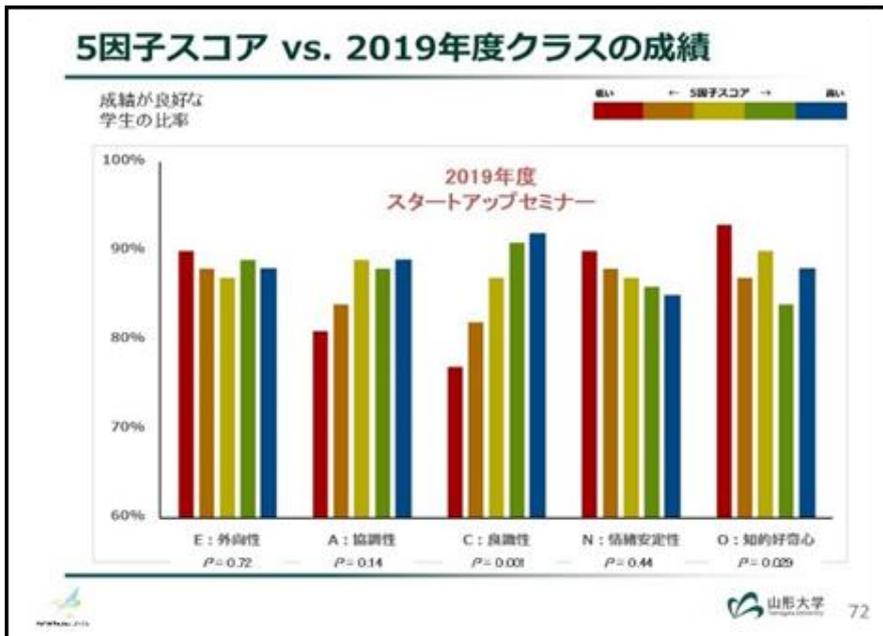
また、出席状況を見ていくと、どうなるかというところなんですけれども、2017 年度から 2019 年度を見ていくと、やはり出席良好者の 80 パーセント以上のうちの 90 パーセントが出席をしています。成績不振者というのは大体 10 パーセントぐらいということになります。3 年間見ていても、概ね同じような学

習行動を取っていることが分かります。



ここから出席状況と成績群という形で見ていきますと、まず 2019 年度を見ていきますと、成績良好者は、概ね 91 パーセントの出席が良好であると。次に、出席不審者というところで見ていきますと、大体 40 パーセント近くの成績があまり良くないという形になっていて、それは 2018、2017 と見ていっても基本的

には同じ傾向になっています。基本的にはやはり先ほども見てきましたように、出席をしていく学生、学んでいく学生の方が成績も良いものが取れる。スキルとかが身につっていく、ということが分かるかなと思います。



これらを5因子のスコアと成績別で見えていきますと、一番分かりやすいのがこの良識性の部分になります。良識性というのは、基本的に勤勉性と言い換えられるんですが、真面目であるかどうかというところで、スコアが高いほど成績が良い傾向にあることがわかります。勤勉性、つまり良識性が低いと成績が良好

な学生が減っていくという傾向になっております。他にも情緒安定性や知的好奇心といったところも、見てはいるものの、なかなか同じような形での読み取りが難しくなっています。なお、例えば情緒安定性に関しては、2017年度と2019年度が類似した傾向を示していて、2018年度は少し別の傾向を示しておりました。

情緒安定性は、情緒安定性が低い方は成績が高いというような傾向にあり、これはスコアが高いグループの成績良好者が占める割合が小さくなる。若しくは知的好奇心の方ですと、2018年度なんですけれども、こちらでは知的好奇心のスコアが高い。好奇心が高いというのは、いろんなものに興味・関心があるということを示していますが、スコアが高いグループほど成績が良好な者が占める割合が少なくなっていく。小さくなっていくというところが分かります。結果的に3年間見てきた結果、確実に捉えられるようになったのが良識性で、良識のスコアが高いグループが成績良好を占める割合が高くなるというところが見えてきました。

次に5因子スコアと2019年度の出席状況を見ていきたいと思っております。こちらにも良識性の方を見ていただきたいと思うんですけれども、やはり良識性が高い学生の方が、基本的に出席率が高いということが分かります。良識性が低い学生というのは、出席率が低い傾向にある、ということになっております。つまり、真面目に学習する学生というのは、出席率も高く、かつ成績も上がっていく。出席することで学ぶことで、成績も上がっていく、という当たり前かも知れないことが確認できる。そういったところが見えてきたかなと思います。他にも2019年度の方を見ていきますと、協調性のグループに関しては比較的、グループワークなどもスタートアップセミナーの中で実施することが多く、協調性が高い学生の成績が比較的高いグループが多いかなというところも見えます。

まとめ：5因子 vs. スタートアップセミナーの出席状況

出席との関連性が見られた因子	読み取れた傾向		
	2019年度クラス	2018年度クラス	2017年度クラス
A: 協調性	協調性の高いグループでは、成績良好者が占める割合が 大きくなる		
C: 良識性	良識性のスコアが高いグループと低いグループ間では、出席良好者の占める割合が明らかに異なる		
O: 知的好奇心		知的好奇心のスコアが高いグループほど、出席良好者の占める割合が 小さくなる	



こうした傾向があって、3年間をまとめていきますと、2018年度では、2017年度の結果は良識性が一番見えたんですけども、2018年度では知的好奇心のスコアが高いグループほど出席良好者の占める割合が小さい。一方で2019年度になって初めて見えてきたのが、協調性の高いグループにおける成績の高い学生群が見えるということですね。それから良識性に関しては、良識性が高いグループの方が出席率も高いということが分かります。

これらの結果から、スタートアップセミナーの成績と出席状況をクロスした観点から、基本的に2017年度・2018年度・2019年度とデータを見てきたんですけども、学生の質はそれほど大きく変わらないのかなど。授業に出て、真面目に受けて、きちんと学ぶ学生ほどきちんとした成績も取っていくことができるということが再確認できたことが重要だと思っています。

分析結果のまとめ&今後の展望

■ スタートアップセミナーの成績および出席状況と関連性があるかもしれない因子

	2019年度クラス	2018年度クラス	2017年度クラス
成績	C: 良識性↑ O: 知的好奇心↑	C: 良識性↑ O: 知的好奇心↓	A: 協調性? C: 良識性↑ N: 情緒安定性↓
出席	C: 良識性↑ O: 知的好奇心↓	C: 良識性↑ O: 知的好奇心↓	C: 良識性↑

■ 今後の展望

➢ 山形大学版Early-Alert (Early-Warning) Systemsの確立

- ・ 学生への介入プログラムを効果的に実施
- ・ 必要な時に必要な行動特性を示す「適応」を指導



一方で、こういった5因子調査を使って、今後実施していきたいと考えているものとして、Early-Alert システムの確立をしていきたいと考えております。これは学生の勤勉性が低いとか、そういったところが見える学生に関しては、なるべく早期に学生に対するケアをしていくことを考えております。実際に、今回データには出ていないんですけども、2018年度ほど2019年度はあまり変化がよく見られなかったんですけども、2018年度は学生、特に良識性が低い学生に対して、できるだけ声かけをするなどのケアをしたところ、この良識性の値が一気に上がっているんです

こうした傾向があって、3年間をまとめていきますと、2018年度では、2017年度の結果は良識性が一番見えたんですけども、2018年度では知的好奇心のスコアが高いグループほど出席良好者の占める割合が小さい。一方で2019年度になって初めて見えてきたのが、協調性の高いグループにおける成績の高い学生群が見えるということですね。それから良識性に関しては、良識性が高いグループの方が出席率も高いということが分かります。

ね。また、成績が上がるという結果も出ております。ただ、もちろん個別学生に対してのケアなので、しかもデータ数も少ないため、2019年はなかなかうまく出てきませんでした。2018年度のようにうまくいった際には、かなり高い値で成績が上がっていくところも見られておりますので、今後そういった形なるべく学生のケアを進めていくことが重要なというように考えております。

このように5因子性格調査を使っていて、必要なときにできる限り大学側でケアをしていけるような体制ですね。こういった体制を来年度以降に、こういった形で整えていくかということが重要なのではないかなというように考えております。

少し駆け足できてしまったので、もう少し5因子スコアの細かい話をさせていただければと思います。2019年度の外向性を中心に今回見てきたのですが、やはり学生の外向性・協調性・良識性とか、様々な指標を3年間データとして見ていくと、大きくは山形大学に入学してくる学生というのは、変化は少ない。特に外向性などは、あまり変化がない。同じような値が見えてくるということも見えてきました。

ということは、今後これから4年、5年と継続して実施していく中でも、こうした傾向を踏まえて使える因子を活用していくことができるようになると思いますので、きちんとデータと向き合っていきたいと思っています。そして、今後 Early-Alert システム以外にも活用していければと、考えております。

以上で、私の方の報告を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

○司会

白石先生、ありがとうございました。では、少し時間に余裕がありますので、ただ今の報告に対して御質問をお受けしたいと思います。いかがでしょうか。はい。今マイクをお持ちしますので、よろしくお願いいたします。

○質問者 1

どうも大変面白いお話をありがとうございました。

○白石准教授

ありがとうございます。

○質問者 1

二つ御質問がございます。5因子分析と成績に関して、男女の差があったかどうかというのがまず一つと、あとスタートアップセミナーの先生方の、何て言うんでしょう、多分

全教員がかかわっているかと思うんですけども、何年に一回多分やらなきゃいけないようなシステムになっているかと思います。それを教えていただければなと思います。

○白石准教授

はい。第一点目の性別に関しては、まだ現在そこまでの分析はしていないので、今後の課題として持ち帰らせていただければなと思います。

二点目に関しましては、私たちの方で、学士課程基盤教育機構の方の教員に関しては、基本的にはほぼ全教員が対応するという形となっており、それ以外に関しては各学部から先生に手伝っていただいています。学部の方は先生を選んでいただいて来ていただいておりますので、それほど各学部には負担をかけない形で、私たちの方で実施をしています。

○千代教授

山形大の千代です。スタートアップセミナーの部門長をやっております。スタートアップセミナーについては大体クラス数が70クラスぐらい開講しております。実はそのうちの8割から9割近くを我々学士課程基盤教育機構の専任教員が担当しております。その残りの1割強を各学部で、特に新人の先生の役割という形で実施していると。つまり教育のためのピアFDという形で、ピア・ティーチングしながら、FDという形でやっておりますので、ほとんどの先生は一回か二回限りということで実施するという形になっておりますので、教員の質については常に一定数保たれていると。もう一つは先生方、各学部の先生方の負担していただいている、若しくはある意味かく乱になる、こういう分析のかく乱要素になる先生方というのはかなり低い水準に抑えているというふうになっています。これによろしいですか。

○質問者1

どうもありがとうございました。

○司会

白石先生が少し言及していましたが、このスタートアップセミナーという授業は規格化しております、教材とか課題などもかなり共通化しています。授業を担当する先生が違って教える内容は同じ、評価基準も同じという形で規格化してまして、後ろにマイクを持っています橋爪先生が中心となって、実施をしています。その課程における学内の反応や実施上の悩みなど、直接お聞きいただけましたら幸いです。

では、後ろの方で先ほど挙手いただいた方にマイクをお願いいたします。

○質問者 2

すみません。今日はありがとうございました。最後のまとめ・展望のところでお話をいただいた、Early-Alert システムの確立というところの可能性という中でお話だったかと思うんですけど、良識性ですとか確か情緒性でしたっけ、のスコアの低い学生さんに働きかけを個別に行ったところ効果が見られたというお話があったかと思うんですけども、どのような具体的なことをなさったのかというのと、どういうふうになくなったのかという詳しいお話をちょっとお聞かせいただければと思います。お願いします。

○司会

すみません。白石先生は去年 10 月に着任した経緯もありまして、そこら辺ちょっと我々の方が先行してやっていたので、私の方から回答させていただきます。基本的には良識性に着目をしています。良識性が低い学生さんというのは、先ほどの分析結果に出てまいりましたように、基本的には授業に来ない、または成績が悪いというようなパターンがこの 3 年間続いて確認できています。こうした蓄積を踏まえ、昨年、実施いたしましたのは、まず良識性のスコアの低い学生さんをまずフィルタリングをし、その後に前期の履修登録の状況を確認いたしました。これは千代先生のアイデアでもあったのですが、124 単位を 4 年間で習得して卒業するには、最低でも半期何単位必要という察しがつきません。すなわち、初期の段階から例えば 4 単位ぐらいしか履修していないという学生さんは、何らかの問題を抱えている可能性があるという風に捉え、これに良識性が低く、出席の状況が芳しくない学生をリスト化しました。

出席に加え、課題の提出状況も考慮しています。橋爪先生が規格化した授業では、ウェブクラスという LMS を使ってやっていますので、初回の 1、2 回辺りからいきなり課題を出していない学生さんを特定することができます。これらの情報を組み合わせて、やっているという状況です。初年度は、情報の取扱いに注意する必要がありましたので、まずコーディネーターである橋爪先生さんにリストを渡して、対象となる学生さんにアプローチしていただくような先生に個別にお願いをしていただいたということになります。具体的な成果としては、それまで出てきていなかった学生さんに関しましては、授業に来るようになって基本的には単位も取得できたという形になります。もし、これを従来のまま放置していると、2017 年時点では、そのまま単位が取れないという形になっていたので、そこである程度機能したのかなというふうに理解しています。2019 年も同じようなことはやっていますが、先ほど白石先生の報告にもありましたけれども、2018 年ほど明確な差は出なかったというところですね。この辺りは、もう少し状況を見ながら判断していきたいと考えているところです。ご質問に回答できておりますでしょうか。もし、まだ質問ございましたらお受けしたいと思います。お願いいたします。

○質問者 3

これ、学生さんたちにはどのような結果の示され方、先ほどの学問基盤力の場合だと、ブロンズとかシルバーとかそういうふうなお話があったんですけど、ということが一点と、それから関連するかと思うんですが、基盤力と言うからには「良い・悪い」の価値づけ、「高い・低い」の価値づけがあるように感じるんですが、その外向性とか協調性とかです、それが高い方がその基盤力として優れているというふうな価値づけをされているのかどうか、されていないとすればなぜそれが力（りょく）、力（ちから）なのかですね。こちら辺がちょっと私の頭の中で引っかかるところがございまして、二点ですね。示し方とそれからその価値づけの問題について御教示いただければと思います。

○司会

私の方から補足いたします。一点目の御質問に関しましては、午後に千代先生から御説明いただくところにスライドを入れております。お手元の資料の 93 ですね。資料下の右手に 93 と入っている部分の右側の図を御確認いただければというふうに思います。

図が小さくて恐縮ですが、質問者 3 から御質問いただいたところには、こういった形で 5 つの因子のその学生さんのスコアというのも並べた形で示しています。1 年、2 年と 2 回答えた学生さんもいらっしゃいますので、年度毎の結果を分かるように表示していくことを考えています。二点目の御質問に関しましては、御指摘のとおりでありまして、我々の中でもいろいろ議論をしまいいりました。人間力をどう量るのかということにもかかわりますが、現状、おそらくそういったテストは世の中には存在しないというのが我々の理解です。

これは千代先生ともいろいろお話ししましたが、じゃあその人間力の基礎となる習慣とかそういったものが何かで見られないのか。特に学生さんが学んでいくうえでの学びの習慣というのも見えてくるのではないかとということで、着目したのが 5 因子になります。もちろん、これで学生さんの優劣をつけようとか、学生さんの性格を変えようというふうには考えておりません。少なくとも我々としては今、山形大学に入ってきている学生さんの特性がどうであって、その特性によって学生さんの学習効果が変わっていくのかということ、当面観察しながらですね、このスコアをどう使っていくのかを考えなければならぬ、そういう状況にあります。お答えにならないところもありますが、認識としてはそういうところになります。ありがとうございます。

○質問者 4

はい。

○司会

挙手いただいている方へマイクをお願いいたします。

○質問者 4

はい。さっきの御質問にもちょっと関連するんですけども、5因子のパーソナリティ検査というのは比較的こう、その個人に対して安定した性格特性だというふうに言われているんですね。そこでそれを利用して、それでその介入というところまで行うということで、倫理的な問題というのはどういうふうに解決されたんでしょうか。ちょっとお聞きしたいと思います。

○司会

この点に関しましては、学内でかなり議論をしてみいました。御指摘のとおり個人の性格に触れるところもありますので、これは慎重に扱わないといけないというところですね。ただ先ほど御回答いたしましたように、このスコアによって我々は学生さんを何かしらタイポロジー化するのではなく、例えば「あなたが優れている・優れていない」「外向性が高い・低い」ということに使うものではありません。あくまでも学習行動の習慣を学生のその因子から何かしら推察できないかということで用いています。事前に学生さんにはこういう目的で実施しますということで、周知した上で回答していただいているという形になりますので、そういったことを踏まえてやっております。また、本日同席しておりますけれども、安田理事からも教育研究評議会で審議いただき、特に教員の反対への対応として、しっかり学内で周知し、合意を得た上で実施しているという流れになっています。

あと、日本版の5因子調査を実際に開発された、富山大学の名誉教授であります、村上先生とも直接何度かお会いして、実施と活用について御意見をいただきながら、現状のような形で実施をして使っているという状況になります。以上、お答えになっておりますでしょうか。

はい。では、若干時間をオーバーしてしまっていて恐縮ですが、午前の部をいったんここで終了したいと思います。午後の部はプログラムにありますように、13時からスタートいたしますので、これから13時まで昼食休憩とさせていただきますと思います。

では皆様、午前の部にご参集いただき、ありがとうございました。引き続き午後1時からスタートいたしますので、それまでに会場にお戻りいただければと思います。よろしくをお願いいたします。